佳　作

「酪農と出会って」

宮城県農業高等学校
農業科　3年　阿部 美里

十、二十年後の私は何をしているだろう。私の耳は聴こえないから、社会の役に立てることが出来ないので両親に頼りながら生きていくだろうと幼い時からずっと思っていました。将来何をやりたいかという夢を持たない私はどうすれば生きていけるか不安なことを抱えていました。

物心をつく前からずっと当たり前のようにろう学校へ通いました。私は聴覚障害者だからろう学校に通うことは当たり前だと感じながら過ごしてきました。

ある日、中学部の行事として全員で体験学習へ行くことになりました。その体験学習を通じて楽しんだり、思い出を残すだけで何か得るものはないだろうかと思っていました。全員でろう学校にない体験をするために蔵王の牧場へ訪れました。そこで、一頭の乳牛と出会ったおかげで私の人生が変わるとは思いませんでした。

乳搾り体験のために牧場を訪れたとき、そこで一頭の乳牛がいました。今まで遠くから牛を眺めたことがあるのですが、こんな近くにいる牛と触れ合うことは初めてでした。牛の体は私より大きいし、今まで感じたことがない迫力で圧迫され、すぐおびえてしまいました。しかし、牛ってどんな生物なのかと疑問を感じました。勇気を振りしぼっておそるおそる牛の毛皮に触れてみると、今まで乳牛はただ牛乳を出すためだけの生物だと思ったのに「暖かい。」また感触が柔らかったのです。私は牛と触れたことで初めて私と同じように生きているぬくもりを感じることができました。ぬくもりのおかげで私はいつの間にか牛への恐怖はすっかりなくなり、かわりに牛のこと好きになりました。

私達目的である搾乳体験のときが来ました。見慣れたはずの乳牛が再び私にとっては未知の生物のような感じがしました。しかし、搾乳体験のために触れなければなりません。私の手が震えました。乳頭を握って教えられたとおり乳搾りをしました。すると、乳頭から一本の白い線が出てきました。それは私達が普段飲んでいた「牛乳」だとすぐに理解できました。その瞬間、いつも私達のためにおいしい牛乳を出してくれた牛の世話をしてみたいという気持ちが芽生え、私は生まれて初めて夢が出来ました。あの時の出来事は今でも脳裏に焼き付いています。私は酪農のことをよく知りません。酪農とはどんな仕事なんだろう。乳牛とはどんな動物なんだろう。私はそれを学ぶために農業高校への進学を希望しました。

しかし、非農家である我が家、ましてや体にハンデがあります。両親の反対を私の牛の勉強をしたいという思いが押し切り、今まで当たり前のように十四年間通い続けたろう学校を卒業し、念願の農業高校に入学できました。初めての普通学校、私の周りには面識がない人ばかり、泣きたいくらい怖かったのを覚えています。しかし、その時頭の中で友達からの

応援や私の夢をふと思い出せたおかげで大きな事でも小さな事でも人と話し合えるように頑張れました。時々伝えたいことをなかなか伝えられなくて辛かったこともあるのですが、目指した夢のために堪えることもできました。

入学してから一年が過ぎ、私は迷わず畜産を専攻しました。実習は、ほとんど鶏・豚・牛の除糞が多く大変です。家畜が掃除の邪魔したり、無邪気に懐いてきます。体力を使って動物達のために掃除したり、臭くて重い糞を運ぶことは大変だったけれど、私のできる事を行えたので嬉しかったです。

初めての搾乳作業を行おうとしたら、見たことがない機械がいました。どうやって使うか戸惑いましたが、先生からあの機械のことを教えてもらいました。あれは「ミルカー」で牛の乳頭を吸い込んで牛乳を取り出すための機械だということを理解しました。あのミルカーがあったおかげで酪農家の労力が省けるので、それを開発した人は酪農家のために考えていたんでしょう。搾乳を行う前に、乳頭を清潔しなければならないのでタオルでふこうとした瞬間、牛の後肢で蹴られそうになりました。幸いにけがはなかったけれど、こんなに蹴られるとは思わなかったので驚きました。乳牛ホルスタイン種の性質は穏和でおとなしいだときいたことがあります。時々気性が荒いことがあるだと初めて知りました。もう一度ふいてみようとするけれど、また蹴られてしまうかもしれないと、おびえてしまいました。近くにいる先生から「遅い。短時間でさっさと消毒して、すぐミルカーをつけなさい。」と注意された私は牛への恐怖感に耐えて足が蹴られてしまいそうになっても乳頭を清潔にするために集中しながらふきました。最後にミルカーを装着させるために乳頭へつけてみると、うまく入れられなかったので悪戦苦闘になりました。やっと装着できたミルカーからパイプラインを通ってバルククーラーへ集めているという光景を眺めながら私は農業が機械化に進化しているなあと思いました。牛乳は牛の乳からミルカーで取り出し、それを集めて牛乳工業へ送り出し、殺菌した牛乳を店へ出す流れという新しい発見を学びました。しかし、牛乳1リットル85円で売るときいたとき酪農家は牛の世話をしながらどうやって生活してきた人なんだろうという新たな疑問が胸の奥に残りました。

春休みを利用して、畜産を学んでいる2・3年生は農家の現状を見て学ぶために蔵王にある農家へ訪れました。あそこには、農業高校より牛の数が多いので驚きました。また、牛の毛皮に糞などが付かずきれいだったところも発見しました。農場主から説明をきくと、体に汚れを付かないように尾にゴムできつく縛って自然に取れたということでした。それだけではなく、牛の寝床にわらやふすまを敷いたので気持ち良さそうに眠っている様子を見かけました。農場主や他の働く人を合わせてたった4人で200～300頭の牛の世話をしているのだそうです。ただ世話をするだけではなく、牛にとってのストレスのない環境を作り出すために寝床をきれいに掃除したり、牛の健康への気遣いをしたりして働いています。

その姿を見た私は大きなショックを受けました。

その牛乳は牛から出したものだけではなく、酪農家の人々が汗を流しながら牛への愛情を込めて世話してあげた努力の成果の証だと気づきました。集めた牛乳を売ったお金は、牛の餌や糞を集め運ぶためのトラクタの費用などに使ってしまうし、休める日があんまりなく生活が苦しいはずなのに、いつも牛の世話しておいしい牛乳を作り出しています。これが酪農家の現実だと知りました。その現実は厳しいけれど、その牛乳のおかげで成長の手助けをしてもらったり、健康に生きることができます。

農業高校で学べたおかげで、少しずつ酪農の意味が理解できたけれど、同時に現実の厳しさや酪農家の生活の苦しさも知ることができました。最近、バイオ燃料のために原価の高騰などで餌のコストにも上昇してしまうということをきいたことがあります。しかし、酪農家は昔から使われたイネやトウモロコシだけではなく、他にコストの低いおからとリンゴカスも牛へ食べさせています。そのような対策を考えたことも知りました。私は農業高校を卒業し、大学で酪農のことをもっと詳しく学ぼうと考えています。牛の飼料や牛乳が苦手な人でも飲めるようなおいしい牛乳を作り出せる勉強をしたいです。

もし、あの時私は、乳牛と出会わなかったら障害者は障害者らしい道しか歩けなかったかもしれません。今、私の選んだ道は辛くて苦しい道かもしれませんが、夢を追いかけることは私にとっての生きがいなので頑張って進みます。

そしていつの日か、私のように子供達に牛と触れ合うことで新しい夢を見つけられるそんな活動をしたいと考えています。